

## 「母語」性を考える ―「世界最初のろう学校創設者ド・レペ」を読む

川口 幸宏

1. 中野善達・赤津政之著『世界最初のろう学校創設者ド・レペ 手話による教育をめざして』(明石書店、2005年)を入手し、一気に読んで読了した。

ド・レペは、イタールが学校医を務めアヴェロンのヴィクトールの教育を手がけた、「パリ国立ろうあ教育施設」の創設者であった。ド・レペの没後、シカールがその後継者として着任した。イタールの教育実験はシカールのもとで行われている。いずれにしても、「パリ国立ろうあ教育施設」はド・レペの考案した手話法によって教育がなされていた。本書からは、ド・レペが手話法の教育を開拓するに至った宗教者としての「生き方」や手話法の本質的な意味(コミュニケーション手段ばかりではなく、思考手段でもあるなど)などを知ることができる。

ド・レペは無償で可能な限り多くの子どもたちに教育した。もともとは私宅で始めたのであるが、フランス革命政府によって、公共施設での全日集団教育が可能となった。アヴェロンのヴィクトールはその教育施設の「生徒」という「身分」であった<sup>1</sup>ことから考えてみれば、法論理上で言えば、イタールの教育実験は特異児に対する個別指導に相当するのであろう。

読み進めていくうちに、ひょっとしたらこれまでぼくは、かなり重大な思い違いをしてきているのではないか、という疑念が湧いてきた。それは、イタールの教育実験環境が手話法一色であったのだなあ、という単純な感想が発端であった。イタールの報告書にもセガンのイタール評価にも「手話」は出てこない。「手話」が一言も触れられていないことに疑念すら持たなかった。それどころか、「発話」訓練をひたすら注視していた。そしてそれは、口話法(発話法)の開発者ペレールの方法的な意味での継承に拠っていると信じて疑わなかった。それを信じさせるバックグラウンドがないわけではない。かのルソーがペレールの教育場に何度も足繁く通っていたとは、ペレール伝を書いたセガンが述べている所であるし、ルソーばかりか啓蒙主義者たちがこぞってペレール詣でをしていたことは常識的に語られている。「ろうあ者が話し言葉で会話をしている！」現象は人々を驚かせたし、ペレールを一躍「偉大な教育者」としてはやす風潮が誕生している。ペレールはイギリス科学アカデミーやフランス科学アカデミーの会員に選ばれているのだから、どれほど社会が彼を賞賛したか、知れようというもの。ペレールは、ド・レペと違って、生活のためにろうあ教育をした。かなり高い「月謝」を取っていたようである。従って、そのような出自の子どもが生徒である。口話法は集団教育では不可能だから、個別教育やきわめて少人数教育となる。「月謝」が高い理由はそこにある。そして「月謝」が高いことによる「副産物」が生じる。それは、身分が高い者、財政が豊かな者、すなわち社会の支配階級によって支持されたということになる。

---

<sup>1</sup> このことについては、川口幸宏著『知的障害教育の開拓者セガン―孤立から社会化への探究』(新日本出版社、2010年)序章において、当事史料を紹介している。

近世の支配階級は同族・血族結婚の繰り返しによって、生得的な各種障害者が多く生まれていた。彼らは資金を惜しまず、後継者になるにふさわしい、音声言語による「宣誓」、書き言葉による「署名」能力を習得させるのに必死であったわけであるから、手話法では意味がなかったという事情も加味される。・・と、ここまで理解してきて、ぼくの鈍い頭にも、次の展開を予想する余裕が出てきた。

口話法は、言ってみれば、宝の山を掘る技術＝魔法に近い。けっしてその方法・技術が大衆化されてはならないはずだ。ド・レペは、一人でも多くのろうあ者がコミュニケーションに参加し、思考する能力をつけることによって、社会的自立を図る、このことこそが神の御心に叶うことだと考え、手話法に基づく教育に携わる教員養成に力を尽くした。しかし、ペレールの口話法はそれが容易には大衆化されないことによってこそ特権的な意味を持つ。ペレールの教え子のマロワ―じつは、セガンをはじめ若きサン＝シモン主義者たちが彼女の発話するのを実際に聞いて驚愕した。セガンが書いているところである―が、「ろうあ者に発話を教える方法はペレール先生しか知りません。この方法について、先生は、私に、他の人にはけっして明らかにしないようにとかく口止めしました」と1803年に手紙に書いている(129ページ)。加えて、マロワは7歳から20年の長きにわたってペレールの元において彼の教授法を熟知していたにもかかわらず、ペレールの亡き後その教授法の後継者にはならなかった。ペレールの「秘技」を秘匿し続けたのである。彼女がペレールの教授法を「公開」したのはじつに1825年のことであったという。つまり、発話という教育結果は公開されたが、それを生み出す教授法は非公開であったわけである。足繁く通ったというルソーら啓蒙思想家らは「発話」という「結果」を見ただけであって、どういうメカニズムと方法によって、ろうあ者が発話コミュニケーション(少人数)できるようになったか、については、ペレールによって秘匿されていたと考えるのが自然である。

ド・レペのフルネームはシャルル＝ミシェル・ド・レペ。シャンセニズム派の職業宗教者。ローマ・カトリック教会から迫害され続けた宗派である。ド・レペはフルネームで語られることはまず無く、フランス語文献ではl'Abée de l'Epéeと綴られることがほとんどである。ぼくがこの世界を覗き込み始めた2003年、まだフランス語文献に当たる前のことだから5月か6月頃のこと、日本語先行研究を読んでいると、「アベ・ド・レペ」という記述が散見されるし、人名索引を見てもそのようになっている。だから、「アベ・ド・レペ」というのがフルネームなのだろうと思っていた。しかし、ド・レペ以外にも「アベさん」がわんさかいるではないか? 「アベ・シカール」もその一人である。我が教育学の世界でおなじみのコメニウス(コメンスキー)も「アベさん」だった。それにしても宗教者には「アベさん」がそんなに多いのか?

フランス語文献でスペルが分かるようになり念のために辞書を繰ってみると、abéeとは宗教者の称号のこと、「大修道院長」とか「神父」とかの字義が記されている。従って、l'Abée de l'Epéeとは、カトリック風に言えば「ド・レペ大修道院長」ということであろうが、その

他、司祭級の宗教者に対する称号として l'Abée がつけられているので「ド・レペ神父」（あるいは「ド・レペ師」）が適訳なのだろう。で、本書では「ド・レペ」「ド・レペ神父」が基本的に使用されているが、「アベ・ド・レペ」とされている箇所も幾つかある。文脈上人名としか読めない箇所なので、「ド・レペ神父」と直されるべきであろうな。

2. 本書によってもっとも啓発されたことは、「母語」という問題だ。ぼくは日本人だから日本語が母語である、同様に地球上のすべての人が「母語」を持っている、そのことを信じて疑わなかったし、「近代」史はその「母語」を剥奪し「父語」に統一する歴史であると確信していた。もう少しぼくに即してていねいに言うと、ぼくの「母語」は伊勢弁・伊賀弁を渾然一体に持つ、きわめて制度地理的に制約された閉鎖的な原語である。しかしその「母語」は、日常性から脱するにあたって、放棄しなければならなかった。そして今はその「母語」を使うことは全くない、たとえ家庭内であろうとも、「故郷」に帰っても。「母語」で育ち、「母語」を放棄し、「父語」で武装することで、「日本人」として生きている。そうすることにきわめて有効な力が働いたのが、「教科書」であり、マス・メディアであった。それが「近代」の事実である。この過程で、たとえば「悪い言葉点検」と称する教育訓練を受け、ぼくはいつも「悪い言葉大将」という不名誉と体罰とを与えられ、ひねくれる根性の源を形成してくれている。「近代」は「第1言語（母語）」を「悪い言葉」として近代学校で刈り取り、「第2言語（父語：人工言語）」を強制使用させることによってますます合理的で強固な人工共同体を創り上げた。

しかし、その「近代」性に強いほころびを見せるようになる。20世紀末の各種マイノリティの権利の容認である。かくして「価値観の多様化」という言葉が当たり前のように使われるようになった。さまざまな「近代」世界にマイノリティが進出し市民権を得るようになった。世界はグローバル化すると言われ、グローバルな視点を持つことが絶対的な価値とさえ考えられるようになった。・・・だが、我が国で言われているグローバル化とは明らかにこのような意味ではない。地球の「一極化」という意味でしかない。「母語」はおろか「父語」でさえ修得する機会が無秩序化し、「英語」という「日本語」に対して言えば「第2言語」、「母語」という距離から言えば「第3言語」としか言えないものが、拒否選択の自由なく、学校という統一的強制収容所の中で強制され始めているのが現状である。

間違いなく、ぼくは今、マイノリティへの道を歩み始めていることを実感している。しかもこのマイノリティは「負け組」という恐ろしいまでの排他的論理によって組み立てられている。

ろうあ者は、ろうあ教育が始められる以前から、マジョリティ社会から排除されていた。幼い頃から捨てられるなど社会的抹殺の対象でさえあった。ろうあ者はマジョリティ言語を習得できないからである。だが、ろうあ者たちは言語を持たなかったわけではない。コミュニケーションをしなかったわけではない。「手話」（身振り）という自然言語（母語）を修得

していた。それを用い、思考し、想像・創造し、コミュニケーションをしていた。ただただマジョリティでないから「人間ではなかった」(セガン 1843 年論文「白痴の衛生と教育」<sup>2)</sup>) のである。

パリろうあ学校の創始者ド・レペはその「自然言語」性を活用し、それぞれのろうあ者の出自社会文化を「読み」「書く」その他を教育する「手話法」を開発した。フランス人権宣言より数 10 年前のことである。彼は宗教者の立場からの博愛主義、慈善を考えたのであるから「近代」の哲学とは相いれない。しかし、その成果は、ぼくに言わせると「もう一つの近代」を象徴しているのである。「もう一つの近代」というのは、「近代」が、やがて「国家」を強固にしていくに従い排他的で単一的な価値を暴力でもって求め始めることに対するアンチテーゼである。「フランス人なのだからフランス語が聞き話せなくてはならない」というのがペレール。これは近代主義者にとってはじつに重要で大切な提言である。ペレールの口話法(発話法)は近代国家が強固になっていくに従い、ろうあ教育の地位を強く占めはじめ、手話法を放逐していく。わが国では、第 2 次世界大戦中に、手話は禁止された。手話を読み解くことができないマジョリティ(軍属)たちが、手話をスパイ用語と同一視したのである。かくしてろうあ者は母語を奪われた。朝鮮民族と同じである。戦後の教育界でも手話法は排斥され、口話法こそが優れたろうあ教育だとされ続けた。口話法がマジョリティにとって大変便利である。それは、マイノリティを理解する必要もなく、自らが持つ能力だけでマイノリティを従属させることができるからだ。そう、かの植民地主義と同じ。それが、わが国のいわゆる「戦後民主教育」の中で行われていた。「平等」概念は、「価値を選ぶ自由とその権利の平等付与」ではなく、「所与価値を誰もが落ちこぼれることなく獲得する平等権」として理解された。「戦後民主主義はアメリカの押しつけ」という古くさいイデオロギー攻撃などは歯牙にかける必要もないが、我々が持ってきた「平等」概念を、マイノリティという視点から捉え直してみると、どうなるのか。手話法か口話法か。そこに象徴されていることを改めて考えることができたことは、たいそう嬉しいことである。

---

<sup>2)</sup> 『初稿 知的障害教育論 白痴の衛生と教育』として川口幸宏によって邦訳され、幻戯書房から 2014 年に刊行されている。